

課題No.3

「土地利用型農業法人が取り組む 加工業務用にんじんの生産安定」



○計画期間：令和4年度～令和5年度

○対象者：（農）タカギ農産，（農）中塚ファーム育み，（農）中田アグリ，
（農）サンファームあがと，（農）みらいす青生

課題の背景

- R3米価が大幅下落 → 露地園芸作物への一層の転換を推進
- 美里町内の農業法人が，加工業務用にんじんの契約出荷に取り組んでいる
→ R3は延べ面積で6.0haまで増加
- 水稲や大豆と競合しない作業体系を組みやすく，収入源として有力

技術的課題

- 排水対策による湿害回避
- 加工業務用用途に適した品種選定と収穫期の拡大
- 病虫害防除（黒葉枯病など）

○定性的目標

- ほ場条件の改善や適期作業の取組が行われるようになる。
- 水田転作による高収益作物として経営の基幹品目となる。

○定量的数値目標

- 対象経営体が加工業務用として12月末までに出荷する総量
70.2t (R3) → 75.1t (R4) → 80.7t (R5)
R4：7%増, R5：15%増

※春播きは中埜地区の4法人で作付け。みらいす青生は夏播きから作付け。

活動内容①

○栽培技術向上支援

■ 土壌診断と施肥設計の実施

→土壌の化学性の改善および施肥コスト削減につながった。

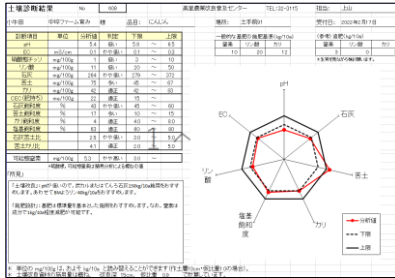
■ 湿害リスク調査の実施

→カットドレーンや弾丸暗渠の排水対策の効果が認められた。

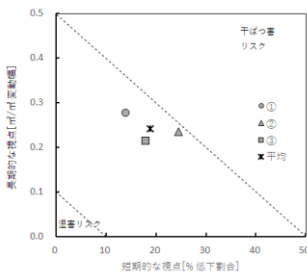
■ 病害虫防除資料の作成

→昨年度に多発した「黒葉枯病」を抑制できた。

土壌診断



湿害リスク調査



防除資料の配布

にんじんの黒葉枯病に注意しましょう！

2021年の7～9月にかけて「黒葉枯病」の発生が多く認められました。症状が進行すると根の肥大に影響が出ます。特に春まきの主力である「みらの春」は、これまでの作付けでは収量品質に優れる品種ですが、「クラスティース」と比較し黒葉枯病に罹病しやすい傾向があるため、予防に際して発生を抑えましょう。

〈被害の特徴〉

- ①初発生時
 - 発生初期は葉、葉柄あるいは茎に、褐色または黒褐色、不整形の小さな斑点を生じ、その葉は、やや黄化する。
- ②病斑拡大期
 - 病斑はしだいに大きくなり、多数発生した場合は、たがいに融合する。病葉は葉の縁が巻き上がり枯れる。根は発病しないが、根の肥大が悪くなる。
 - 葉柄上の病斑はややくぼむ。
- ③多発時
 - 湿度の高いときには、病斑上に黒色のカビが発生する。
 - 葉の縁が褐色または黒褐色となる。
 - 多数の葉が輪状枯死すると被害を抑制できない場合もある。

(裏面に続く)

活動内容②

○栽培体系確立支援

■ 品種検討実証ほを設置

- 作期の拡大（9月収穫）を図る（試験中）。
- 種苗会社を招いて現地検討を実施し、栽培の要点を確認した。

■ 定期的に生育確認および生育調査を実施

- JAと随時情報を共有し収穫期の予測に活かした。

■ 収穫調査の実施

- 品種特性を把握することが出来た。

品種試験ほの現地検討(6/24)



生育調査

		草丈(cm)	最大葉長(cm)	葉数	備考
あがと	6月1日	4.7	5.2	3.7	3/30播種
	6月29日	30.6	33.0	7.3	
タカギ	6月1日	12.1	14.6	5.9	3/30播種
	6月29日	45.8	47.5	8.7	
盲み	6月1日	10.1	12.4	5.4	4/1播種
	6月29日	49.2	52.1	8.9	
中田	6月1日	18.2	21.6	7.0	3/26播種
	6月29日	54.9	61.0	10.0	

収穫調査(7/14)



7/15~16 大雨被害

中卒地区で累計226mmの降雨
1時間あたりで最大40mm
(県河川流域情報システム)



冠水したにんじんほ場
(7.16 タカギ農産撮影)



湿害で萎れたにんじん(7.19)



根部が腐敗し
収穫不可能



浸水により
先端部が腐敗

湿害で収穫不可能となったにんじん



浸水によりシミ症状や割れが発生

中埜地区の全ほ場で浸冠水 大雨被害前から約8割の減収
排水対策は講じていたが、対処できない降水量だった

今年度後半に向けて

- 夏播きにんじんの発芽安定→高温乾燥時の灌水
- 黒葉枯病およびアゲハ幼虫やヨトウムシの防除対策
- 作期拡大（冬越し）に向けた品種比較試験

大雨被害の軽減に向けて

- 明渠の確実な設置
- 緑肥（エン麦）の導入による透水性の向上
- 湿害に強い品種の検索